故郷第六場面　読んだ読んだ

三年四組　氏名

彼は後ろを向いて、「シュイション(水生)、だんな様にお辞儀しな。」と言って、彼の背に隠れていた子供を前に出した。これぞまさしく三十年前のルントウであった。いくらかやせて、顔色が悪く、銀の首輪もしていない違いはあるけれども。……夜はまた世間話をした。とりとめのない話ばかりだった。明くる日の朝、彼はシュイションを連れて帰っていった。

ルントウは暮らし向きがあまりよくなく、世間は物騒で、金は取られ放題、作柄もよくないが、売らないと腐ってしまう。そして、税金も重なり、でくのぼうみたいな人間になってしまった。そのルントウを母は哀れみで「持っていかぬ品物はくれてやろう」と言っており、また主人公も、知らぬ間に「でくのぼうのような人間」とさげすんでいる。

さん

久しぶりに会ったルントウは、昔に比べて姿が変わっていた。それは姿だけでなく、性格も変わってしまっていて、話題や主人公との接し方も違った。これらの変化は環境によって変わってしまったと思う。でも、環境によって変わったのは、ルントウではなくて、主人公も友を「でくのぼう」と思ったりするなど、変わってしまった。

くん

主人公は、身なりや話し方が変わってしまったルントウに同情をした。しかし、その同情の中には母に乗っかったルントウへの見下しが多少なりとも含まれていて、主人公がたくさんのものが変わってしまったと思ったのは、自分が貧しくなって性格も変わってしまったからかもしれない。

さん

主人公はルントウに他人行儀にされて寂しい感じがした。このようなルントウに換えてしまったのは、世間や金である。それを知った主人公は、ルントウに対して「でくのぼう」など、昔なら言わなかったことを言ったりして、下に見ていることが分かる。それだけルントウは変わったし、主人公も変わってしまったことが読み取れる。

くん

貧しくなったルントウは、主人公に敬語で話したり、他人行儀になってしまった。ルントウの「……」から読み取れる、昔のように話したいけど話せない悲しい心情が伝わってくる。

主人公はこんなルントウに同情している一方で、ルントウをでくのぼうと呼んだりと、下に見ている。表面ではルントウの見方を演じているが、心の奥では気付かぬうちにルントウを、そしてヤンおばさんや故郷をもさげすみ、変わってしまったんだと諦める主人公の心の変化も表れるのだった。

さん